論文の内容の要旨

論文題目　　平安王朝物語の親と子

氏名　スエナガ　エウニセ　トモミ　タカハシ
Suenaga Eunice Tomomi Takahaschi

『源氏物語』をはじめとする平安王朝物語の主要なテーマは王権獲得や男女間の恋愛だと考えられている。本論の目的は、王権論や恋愛を中心にした論では見えてこない、物語における親子に関わる主題や論理の重要性を明らかにし、物語の新しい読みを提示することである。そのために、『源氏物語』や『狭衣物語』における親子を様々な観点から考察した。

まず親の子に対する教育を考えるために、第一部では貴族の姫君に仕える、「童」「童べ」と呼ばれる使用人の童女たちの役割を考察した。姫君の親や保護者の大切な役目の一つは、優れた乳母や女房、そして童女を姫君のために雇うことであった。物語で繰り返し語られるとおり、姫君が過ちを犯すのは男を手引きする女房がいるからであり、親が娘の性や身体を管理するためには、姫君に仕える乳母や女房を管理する必要があった。乳母や女房の論は多く存在するが、使用人の童女についての研究は少ないので、第一部ではそれの考察を試みた。まず「童」「童べ」と呼ばれる者が使用人であるか否かを確認し、使用人の場合はその性別や主人を確認した。この過程で、『源氏物語』胡蝶の巻で舞を行う「童べ」は「童女」だと従来から指摘されてきたが、それは「童女」ではなく、貴族の子弟である可能性が高いことが確認できた。

第二部では『源氏物語』の構造に関わる継子譚の話型と兼輔歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」や『伊勢物語』六十九段の伊勢の斎宮の禁忌の恋の引用であると指摘される「闇」表現を考察した。継子譚の話型でいえば、すでに指摘されているように『源氏物語』第一部は光源氏と紫の上の二人の継子が試練を乗り越え幸福になる構造である。本論では、二人の継子が幸福になる過程で、継母による虐めが少ない、もしくはないにもかかわらず、継子は継母の実子の結婚を何度も妨害していることを確認した。そして『源氏物語』第二

部で朱雀院が娘の女三の宮を源氏に降嫁させるのは、継子譚の構造でいえば、理不尽なまでに結婚を妨害された継母（弘徽殿女御）の実子（朱雀院）が、継子（光源氏）に不幸な結婚をさせて報復しているのだと読めることを、そして女三の宮の観点から見れば、継母ならぬ実の父により年老いた男と不幸な結婚をさせられる構造であることを指摘した。「闇」表現の考察からは、「心の闇」「闇にくれまどふ」「子の道の闇」はある程度物語で使い分けられていること、物語第一部では「心の闇」表現は王権獲得の物語と強く結びついていること、物語第二部と第三部では「子の道の闇」は矛盾する期待や曖昧な態度で娘を不幸にする朱雀院や八の宮などの父の発言に見られることが確認できた。付論では、兼輔歌の意味やそれが詠まれた状況を考察し、それは従来指摘されているような和やかな場で親心を詠んだ歌ではなく、緊張した席で兼輔が時の権力者の忠平に、相次いで子や孫を亡くした忠平の姉妹の穏子に同情を示しつつ、「心の闇」、つまり疚しい心のないことを訴える歌であるという読みを提示した。

本論第三部では、『狭衣物語』における親子の葛藤を考察した。『源氏物語』をはじめとする平安王朝物語では、両親もしくは片親が不在である主人公が描かれることが多い。両親がそろった狭衣を中心に語る『狭衣物語』では、親の期待に添わない願いを抱く子の苦しみがクローズアップされ、親より優れた子に親への従順を要求する「孝」思想の矛盾が明らかになるが、親が子の優位性を認めた時点で物語は天照神の託宣という超越的な存在によって収束をはかると論じた。

本論第四部では、『源氏物語』に描かれる親子関係を再確認した。『源氏物語』第一部では皇権から疎外された光源氏が王権を獲得する物語が中心に展開されるので、親子の葛藤や対立は問題にならないが、物語第二部と第三部では、親の不適切な教育、矛盾する期待や曖昧な態度などに翻弄され、親の期待に応えられないことで罪悪感に苦しむ娘たちの主題がクローズアップされると論じた。第二部では新しい妻を迎えた夫の裏切りに苦しむ紫の上の苦悩が焦点化され、第三部では男君との関係で悩む宇治の姫君たちや浮舟の苦悩が描かれ、罪深い「女の身」という表現が繰り返されるので、第二部と第三部の主題は女の苦悩や女の生き難さだといわれている。本論では物語第二部と第三部で新しく登場する女三の宮、落葉の宮、宇治の大い君、中の君、浮舟などの女君たちは親と親密な関係にあり、女君たちの苦悩は男の頼りなさよりも、親の期待に反して「人笑へ」になることへの恐れからくるものであることを確認し、物語第二部、第三部の主要なテーマは女の苦悩ではなく、親の教育や態度に由来する娘の苦悩である、つまり親の矛盾する過剰な期待や曖昧な遺言などによって死を願うほど追い詰められる娘たちの物語であると論じた。

『源氏物語』最後の主人公である浮舟の物語の結末をどう解釈するかは、『源氏物語』全体を理解するうえでも重要な問題である。かつて浮舟は出家して救済されるという読みがなされていたが、最近では出家してもなお男の欲望の対象となる女の身から自由になれない浮舟は救済されないという意見が主流である。本論では、入水を試みたが横川の僧都に救われ、実の母とは違い、自分の性格や選択を認め受け入れてくれる横川の僧都の妹尼という新しい〈母〉とめぐり会い、新しい〈母〉のために生きたいと願うまでに快復している浮舟像を確認し、このような結末を用意する『源氏物語』は、浮舟、ひいては娘や女性の救済を志向して終っているという新しい読みを提示した。